

社会運動の担い手の連続性と断絶性

——日本軍「慰安婦」問題解決運動を事例に——

○一橋大学大学院 永山聡子

1 目的

この報告の目的は、日本のジェンダー・フェミニズム研究に多大な影響を与えたにもかかわらず、社会学的視点からの社会運動論では語られることが多いとは言えない、日本軍「慰安婦」問題解決運動を、社会運動論的視点から再構成を行う。(代表的な研究：鈴木 2013)その上で、現在でも継続している要因を分析するとともに、担い手の継承の連続性・断絶性に注目し、分析・考察を行う。そして、既存の運動が持つ重要な様々な資源の位置、その継承の重要性和困難性を考察する。

2 方法

そこで、データとして大きくわけて3つを使用することにする。

第1群は、1990年代から現在に至るまで、日本軍「慰安婦」問題解決運動がどのように運動展開を行ってきたのかについて、運動団体の機関誌・パンフレット・資料・文献などの分析を行う。補足的に集会の歴史的変遷などの流れも確認する。

第2群は、それらの運動がどのように社会化され、日本社会を中心に言説化していったのかを、1990年代から現在に至るまで、新聞紙面を中心にメディア媒体の分析を行う。

第3群は、運動関係者へのインタビュー調査を行う。現在でも活動している人々を中心にインタビューを行う。

3 結果

分析の結果、以下のようなことが明らかになった。

第1は、運動の担い手の変化である。1990年代の運動を主導してきた人々は、第一義的に、女性に対する性暴力、日本の戦争責任に対する問題意識を共有していた。しかし、2000年以降は、それに加えて、被害女性の支援を通じて運動に参加する人々や、一通り、日本軍「慰安婦」問題の問題群を認識した上で、運動に取り組む1980年代から1990年代生まれの人々が参加するようになった。

第2は、運動の形態である。従来通り、集会の企画・運営、議員への要請活動に加えて、東アジアを中心とした解決ネットワークの構築、アートアクティビズムの連携、映画上映会を問題解決運動として位置づける形態が増加した。

第3は、日本軍「慰安婦」問題解決を阻む要因分析を行う運動が新たに登場した。

第1、第2、第3ともに連続するものと、断絶するものがあった。

4 結論

日本軍「慰安婦」問題解決運動の変遷を分析・考察することで、社会運動を単純な「衰退」として捉えることではみえてこない連続性と断絶性が明らかになった。

主要文献

鈴木裕子(2013)『日本軍「慰安婦」問題と国民基金』梨の木舎